

教育委員会

コラム Vol.26

教育長室の窓から

会話と対話



皆さんは、劇作家で大阪大学教授や東京藝術大学特任教授などをされた平田 オリザさんをご存知でしょうか。私ごとですが、以前に勤務した行政（福島県教育委員会）の時の学校訪問で、平田さんが外部講師を勤めていた学校の授業（平田さんと高校生の授業でした。この学校は、平田さんの指導を受けながら演劇にも力を入れていました。）を参観し、おこがましくも指導助言をしたことがありました。その平田さんが「会話」と「対話」について次のように述べられています。

「会話というのは、親しい人同士のおしゃべりだ。対話は、異なる価値観や意見を擦り合わせる事。会話なら今の子どもは友だち同士でとてもよくしゃべっている。ところが、いざ立場の違う人と出会ったり、会議で意見を言うことになると言葉が出ない。人と違って自分を突出することが不安なのだ。昔は、地域で価値観が違う大人と対話する体験ができた。だが、地域が崩壊し、少子化が進んだ今、コミュニケーションの経験が失われてしまった。一方、世界はグローバル化し、情報社会になった。いろんな価値観の人と対話する力はますます必要になっている。」

今から 20 年以上前の話になりますが、平田さんは、その頃から今の時代を予測していたとしか思われません。（劇作家、演出家、小説家、教育者としての叡智でしょうか。）学校教育の中でも、言語力の育成・活用が大切とされ、言語活動の充実に取り組んでいます。

夏季休業に入り、子どもたちは、学校では経験できない体験や人との関わりを家庭や地域社会で経験するかと思います。ぜひ、平田さんの言われる「対話」を意識してみるのもよいかと思います。

教育長の

ちょっといい話

薩摩義士ってご存知でしょうか・・・



今から 250 年以上前、徳川幕府は薩摩藩に対して、美濃の国、現在の岐阜県にある木曾、長良、揖斐三川の治水工事を命じました。当時の家老平田 靱負をはじめとする薩摩藩の人々は、大変な苦勞をして一つひとつ完成をしていきました。薩摩藩にとっては、大きな犠牲を払った工事でしたが、流域に住む人たちにとっては、何ものにもかえがたい贈り物となり、岐阜の人々は、薩摩義士たちを「薩摩さま」と呼んで報恩感謝の気持ちを忘れないようにしています。

実は、本町に平田 靱負のお墓があることから、岐阜県養老町から毎年、お墓参りに訪れていただいています。今年も養老町長、顕彰会長はじめ 20 名を超える皆さんが本町を訪れました。養老町の皆さんの薩摩義士に対する想いに触れ、あらためて郷土の優れた先人たちの業績を誇りに思いました。

平田 靱負の言葉に「美濃も薩摩も同じ日本。他人の苦難を救うのが人間として最も重要であり、それが、薩摩藩ばかりではなく、日本国全体のためになる」というのがあります。

本町の子どもたちにも、先人の「ものの見方や考え方」を学んで、肝付はもちろん鹿児島、日本、世界ために役立つ人間に育ってほしいと願っています。

